

過疎地域ターン者の住居と生活について

—— 色川地区を事例に ——

A Study on the Life and Housing of People Turn to Depopulated Area

—— In the Case of Irokawa ——

梅 原 清 子 深 渡 直 子
Kiyoko UMEHARA Naoko SHINDO

2008年10月3日受理

I はじめに

農山村に残る暮らしの中には、現代の生活に継承し今後発展させていくべき生活の基本的な営みがある。これをわれわれは「第一次的生活文化」と称している¹⁾²⁾。帰農するターン者たちは生活の原点を見据えたアイデンティティを有し都市の暮らしを経て新たに農村生活を理解しつつ、第一次的生活文化を生活志向と生活実態において受け継ぎ活かしているのではないかと考える。

前報²⁾では、和歌山県那智勝浦町色川地区をとりあげ過疎地域 I ターン者における、移住に至った経緯、家族と生活実態の概要、および特徴的な戸別事例のいくつかについて報告した。今回は、彼らの生活基盤となる住居とそこでの住まい方に関して検討する。

II 研究概要

1. 調査対象

調査対象者は、前報に同じで、色川地区 I ターン者 55世帯のうち16戸である。選定に当たっては、ターン時期や職業形態等多様なものとなることを重視した上で、那智勝浦町色川出張所(以下、役場とする)の関係者、および I ターン者の方自身から、調査の趣旨により適切な方を紹介していただき、調査実施の日程も考慮して16戸に調査を依頼した。これを A～P 家と表す。なおこの中には山村の環境保全のための県の施策「緑の雇用事業」に関わる2戸を含み、農業中心の他のターン者と異質な部分もあるが、定住促進に連なる形態の一つとして加えている。

このほか、ターン者を迎える側の、地元農家の住まいと住まい方についても、1例のみであるが、聞き取りを実施した。R 家とする。

2. 調査方法

これも前報に同じである。調査時期は2006年5月と9月の延べ6日間、調査者は延べ12名である。聞き取り調査は、予め定めた質問表を基に出来るだけ対象者に自由に述べてもらい、住居の写真撮影と聞き取り採取

は状況に応じて行った。

III 調査結果及び考察

調査結果については、概要を一覧表にまとめ末尾に掲げているので参照いただきたい。



写真1 口色川集落周辺。左上は県道

1. 現住宅について

①住居の種類

現在の住まいであるが、地区に点在する古い農家に暮らしている人が10戸と多い。その他は、ターン後に自宅を新築(3戸)と公営住宅に入居(3戸)である。

何箇所かに建てられている公営住宅であるが、色川地区の公営住宅には、「ふるさと住宅」と呼ばれるものと、「担い手住宅」と呼ばれるものがある。前者の正式名は「ふるさと定住促進住宅」で、新規定住者のために1995年から2002年にかけて和歌山県と那智勝浦町の出資で合計10棟建てられた町営住宅である。また、「担い手住宅」の正式名は「緑の雇用担い手住宅」であり、林業振興のための「緑の雇用事業」に関わる県営住宅だ。これも最近、2003年から2004年にかけて建てられた6棟である。調査対象とした住宅は、ふるさと住宅1戸と担い手住宅2戸である。所有の関係については、住宅が借家であるのはこの3戸を含む5戸、その他11戸は持ち家であった。

②建て方

母屋は、すべて木造で、1戸を除き平屋建てである。屋根材は瓦葺きと鉄板・スレート葺きが相半ばしている。軒の出は概して浅く、県北・中部の深い軒の出をもつ民家と対照的である³⁾。瓦葺きの減少傾向や浅い軒の出は、大風によるあおり被害を配慮したこの台風常襲地域での特徴と考えられる。しかし軒の浅さは、年間降水量3000mmという多雨地域としては雨の吹き込みが予想され、そのためか塩ビ波板等で軒先を保護した例も数戸みられた。妻側には、多雨地域に普遍的な三角形の雨除け板⁴⁾も用いられている。また豪雨に対処するため外壁をペンキ塗装の板壁にしたものも見られた(写真2, 3参照)。

公営住宅等近年築造された6戸についても、それぞれの条件により一様ではないが、外見上の新奇さはとくになく、むしろ地域にとけ込むよう配慮されたつくりといえる(写真4参照)。



写真2 地域に典型的な外観の古い農家住宅(K家)



写真3 石垣の上に建つ地元農家の住まい。奥が母屋



写真4 担い手住宅(右手)。左手は籠ふるさと塾

③住宅規模と間取り

住宅規模は概して小さい。畳数で示すと、4.5畳や3畳という小間が多く8畳以上の部屋は殆ど見当たらない。6畳以上の広い間については、すべて近年の建築か改造によって作られたものである。したがって居室畳数の平均を求めると27.0畳となり、総務省・平成15年・住宅土地統計調査による一戸建て全国平均42.4畳とは大差があることがわかる。

間取りについてまず当地区伝来の住宅は、図1にみるように、土間にせり出す落ち間になった板の間の上手に、小間ながら田の字型の部屋を配する整形四間取りをとっている。前面上手は座敷風で床の間が、下手の部屋には式台様の玄関が付いている。なお式台は出入りの機能を果しているようにはみえず、また全ての住宅にあるわけでもない。前面には縁側が付属し(正式な入側縁ではなく濡縁も多い)開放的であるが、背面側には斜面の石垣が迫りほぼ全長物入れ等で塞がれている。この前面開放・背面閉鎖の形式は、山腹に横長の敷地を求める山間地民家に特有なものである。さらに間取りについても敷地の制約から横に細長い並列型となることが多いが、ここでは地域的に四間取り型が卓越している。結果として、個々の部屋が4.5畳以下の小間となると考えられる。しかし参考例としての地元住民R家(1945年建築)の場合は、同様の敷地、四間取りであるが小間ではなく6~8畳の広さとなっているところをみると、敷地条件だけではなく建築年代や住宅の階層性も絡んでいるかも知れない。なお1990年に移住したI家では、ターン後の新築だが「田舎風の建て方にするが夫が決め」6畳間が3室並列する背面閉鎖の間取りとしている。もと茶畑だった土地に近辺の大工に建ててもらったという。

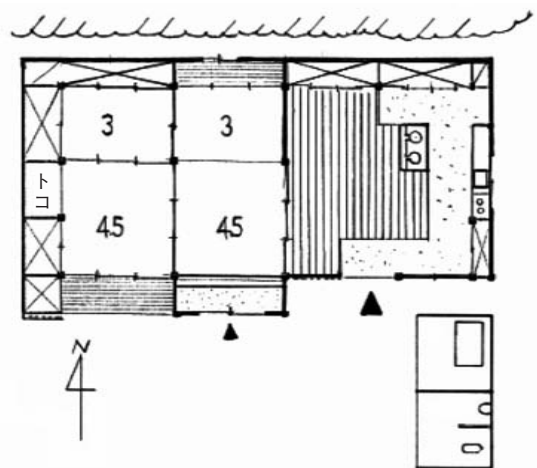


図1 当地区に典型的な整形四間取りの住宅平面(L家)

2. 住設備について

居住のためには、空間や間取りだけでなく大小さまざまな住宅設備が必要であり、現代では設備の占める比重がますます高まっているといえる。調査対象住宅

での設備空間の状況と使われ方についてみることにする。また、設備を運転するのに必要となるエネルギーについても併せてみていく。

①台所

調理用加熱器具は、大半がプロパンガスによるガスレンジである。伝統的な器具であるカマドは、モチ米を蒸すときの使用が1例みられたのを除けば、通常の煮炊きに使用されることは全くなかった。カマドやその跡は薪ストーブが置かれたり、物置台に使われたりしている。入居時壊れていたのを撤去した例もある。替わってガスレンジが一般化するなかで、1例のみオール電化方式によるIHヒーターがみられた。この方式は、全国的に急速な勢いで普及しているが、この地区でもIHに変える人が多いということが聞き取りで聞かれた。しかし家のまわりで「間伐材はいくらでもあり燃料には困らない」土地柄である。カマドは廃れているが、薪ストーブは人気ようである。3戸に導入され、他にも薪ストーブのある家が理想だと語る人(E)、薪ストーブを入れるために土間を残すという人(F、K)もいた。薪ストーブは調理用というより暖房器具だ。利便性は石油ストーブにおよばないが、やわらかな暖かさでパチパチ燃える自然の炎に心を和まされる⁵⁾。今は姿を消したが近年まで山間地、高冷地に残されたイロリに通じるものがあって、燃焼性や排煙を改善したのが、薪ストーブといえるかも知れない。この他にも、自作の炭焼き釜で製炭したり、消し炭を使って七輪を活用していたり、パン焼き釜を手作りしている人もいた。バイオマスエネルギーや食生活へのこだわりが感じられるところである。



写真5 システムキッチン(奥手)を備えた
リビングキッチン

②風呂

風呂設備についてみていくと、一覧表のように薪をくべる五右衛門風呂からオール電化による給湯タイプまで、様々である。五右衛門風呂は特に男性に人気で「薪をくべながらお風呂に入るのは最高に気持ちいい」と満足気である。Eさんはお風呂好きが高じて通



写真6 元カマドの上に置かれた薪ストーブ。
消し炭壺もある

称「カナダ風呂」をカナダから材料を取り寄せて(以前の住まいに)作った。普通の5倍の水が必要な巨大な桶のようなお風呂で、一度水を溜めると1週間は炊き返して使用する。素朴な五右衛門風呂は、初期のころ移住した方々の住まいに多く見られ、90年代以降、年代とともに姿を変えるようである。燃料のほうも灯油と薪の併用、さらにガス、電気温水器へと利便性が向上する。あわせてソーラー(太陽熱温水器)の利用は7戸に認められた。



写真7 巨大な桶の「カナダ風呂」



写真8 自作の五右衛門風呂 焚口

③便所

その殆どが汲み取り式である。さらに自家汲み取りか業者委託かの別は、前者が6戸みられ、鶏糞や糞殻とまぜて作物の有機肥料として活用するケースが多いようである。家への道が狭くて業者のバキュームカーが入って来られない(F)、ということもあるが、「肥にもなつて一石二鳥」と考える人が多い。業者に委託する場合、汲み取り料金を節約するため、使用後の落とし紙を便槽に入れないで別容器に分別している家庭もみられた。調査対象住宅ではないが、2つの便器を並べ片方にはフタをして半年交代で使用するというユニークなトイレにも遭遇した。半年間で便槽の尿尿を発酵・乾燥させ無害化して肥料とするそうだ。このように便所や尿尿を「汚い」という忌避意識は概して薄いと感じられたが、それでもなかには「生理衛生が気になっていた妻」(F)や「浅くて跳ね返るポットン便所が悩み」(P)もある。その解決策として汲み取りでありながら水洗式に近い簡易水洗トイレが普及し、6戸が設置している(確認できたものだけで実際にはもっとあるかも知れない)。なお合併浄化槽による水洗トイレの例もある。A家の妻は、昔ながらの便所は嫌という記憶があり絶対水洗がよかったといい、もとの職業が保健関係だったこともあって、近隣では唯一の合併浄化槽を移住時に設置した。費用の3分の1は、町から補助がおりた。便所についても多様性が交錯している。



写真9 風呂と便所をログハウスで別棟に作る

④冷暖房設備

これについては、エアコンの設置は殆どなく、夏は扇風機だけで十分ということであった。標高400m近い山間地で「天然のクーラー」「谷川の傍で冷房はいらない」のである。また、年間平均気温16℃という温暖な地域ではあるが、冬は冷え込み氷が張ったりしもやけができるほどだという。また前面が開けているので日当たりはいいが、たてつけの悪い古い民家ではすきま風が通り抜けることであろう。真新しい公営住宅に住むDさんですら「雨戸がなくて非常に寒い」といって

いる。これに対して暖房器具ではコタツ、石油ストーブがポピュラーである。しかし、住宅の実態や燃料調達の条件からすると、前述の薪ストーブの人気の高いのも、頷けるところであろう。

さて、この地域は全国でも名うての多雨地帯であり、かつ敷地配置により背面には石垣が迫るという地理的特徴がある。そのため、二重三重に住宅内は高温になる。ここで必要な設備と見受けられたのが、家電製品の除湿機である。普及率が高いとはいえないが、設置しているLさんによれば、必須アイテムで「部屋に除湿機かければなし」である。「水はけが悪くてカビがすごい」「数日留守をしたら衣類も食器もカビだらけに」「湿気の中に生きている。なぜこんなに閉め切ったつくりにするのかわからない」とターン者の何人かが訴える。そこでは対処療法ではあるが、除湿機はかなりの威力を発揮するようである。同様な山里に暮らす人びとの「風を通す」暮らしの知恵⁶⁾の示唆深さをあらためて感じる。なぜこんなつくりと、と疑問を呈していたKさんは、住まいに風を通す工夫をあれこれ思いつき、障子紙の代わりに網を張る、背面の押入れを一部ぶち抜き網を張るなど即実行している。



写真10 押入れの壁を穿った向こうに石垣が見える

⑤生活用水

グループで飲料水のタンクを管理し利用する場合(飲料水供給施設)と個人で谷川からパイプで引いている場合があり、その両方を備える場合が多かった。泥つきのものの下洗いは屋外の流し放しの沢水で、他は簡易の水道や揚水ポンプの井戸水でと使い分けるのである。個人で引いているBさんやFさんは、タンクの管理を自分でしている。水量は豊富で枯れることなどは殆どないが、大雨のときにはまず容器に水を溜めておく。水が濁ったり葉っぱや石で詰まったりするからである。これまで、きれいな水が豊富にあることは色川の魅力の一つに挙げられてきた。東京から移住したばかりのKさんは「水がいい。浄水器がいらないなんて素晴らしい」と語る。しかし実は最近、地区の生活用水

から大腸菌が検出されたということがあり、そのため遠方まで車で飲み水を汲みに行くと話す人も数人いた。自然の水は、複雑な処理過程を経て家庭にとどけられる都会の水よりはずっとおいしいが、野生動物等による汚染のおそれは不可避ともいえる。いずれにしても、水について他人任せの無関心では暮らせないのが山里の暮らしなのである。



写真11 流し放しの沢水。洗い物や飲用にもなる

⑥車

交通に関しては、自家用車は16戸もれなく所有されている。自家用車なしでは農業をはじめ日常生活が困難で、車を運転しない高齢者は単身では暮らしにくい。ため、地域を離れざるを得なくなるケースも多いとき。買い物に週1～2回山を降りる、地区外の通勤に毎日使う、という頻度の人もいるが、地区内のすぐ近隣であってもアップダウンの坂道では車によるしかないのである。「今にも止まりそうなめっちゃ古い車に乗っていたが、この頃は(後からのターン者は)結構いい車になった」との寸評もあるがとにかく車は最低限の必需品となっている。したがって、家計の出費として大部分を占めるのは「自動車の維持費」であるという話は、どのターン者からも聞かれた。

地域内県道には紀伊勝浦駅と結ぶ路線バスが走っている。町営バスのため料金は比較的抑えられているとはいえ回数が嵩めば高負担となるし、運転本数は一日3往復と限られている。それでも隣接市町に通学する高校生にとっては貴重な足でありこのバスの運行により町に下宿せずにすむようになった、と評価されている。むろん自家用車で送迎が必要となることも度々である。なお道路は舗装され交通量は少ないが、道幅は狭く対向時には苦勞をする。また落石、がけ崩れ、動物飛び出しなどに日常的に注意が必要ではある。要するに、中山間地域で暮らしていくために車は命綱であり、運転に堪能でないに移住は不可能、といって過言ではない。

3. ターン後の増改築・改装と住まい方

増改築の現状を通して、ターン者の住に対するこだわりを明らかにしてみたい。ここでは、住宅の老朽、広狭、快適さの3つの側面について検討する。

①老朽への対応

既存の中古住宅に入居した場合、補修工事が必要となることが多い。空き家として無人の期間があったり前住人が困窮するわけがあったりするからである。背景には、居住者に住宅のストックの理念やノウハウが獲得されているとは言い難い日本の住宅事情がある。それまでの使い方、管理の如何によるのだが、もともと建築後100年以上(と伝えられる)を経過した、いわゆる耐用年数を過ぎた物件である。加えて地域的宿命ともいえる多雨・高湿・大風という建物にとっては過酷な条件のもとで、住宅の消耗度は激しい。

「畳が湿気でほとんどだめになった。土台も腐って床がぬけていた(P)」「床下が腐っていたのですべて替えた(K)」「シロアリの被害などひどい状態(A)」「雨漏りがするので屋根を瓦からスレートに葺き替えた(J)」など、大掛かりな改修工事を行ったのは5戸、



写真12 腐って床板が落ちていた

中古住宅の半数である。Aさんは、「改修するうちに、ここはだめ、あそこもだめとなって、いっそ建て直す方が安くついたと後悔している」とすら話す。改修費用に占める最大のものは人件費であることはよく知られている。Kさんは、腐った土台と大引きの取替えは大工に頼んだが他は自分たちでしている最中である。

「始めは全部頼むつもりだったが、こっちの人の話を聞くと自分でもできると思って」と日曜大工の店への材料買出しに勤しんでいる。

②広さへのこだわり

ターン者にとって現住宅は、一般に手狭なようだ。前述したように対象住宅は小規模かつ部屋それ自体が4畳半以下の小間が大半である。さらに、入居家族人数に対応させた居住密度は概して高い。とくに今は進学等により別居しているが子どもが成長期には切実なものとなる。持ち込む家具什器はターン者といえども

少なくない。これらにより、多くが移住後に家族のライフスタイルやライフステージによって手を加えて改造している。「床の間や押入れを全てなくした。少しでも広く使いたかった(P)」や「テレビを見るには狭すぎて距離がとれない、蚊帳を吊ることもできない(J)」として、多くの住宅で、部屋を仕切るふすま、部屋と縁側の間の障子はずし、開放的な空間として住まわれていた。本格的な増築では、夫の部屋や作業場を自作した例(B)、子ども部屋と台所を住宅背面に出し屋式で設けた例(F)もあった。この子ども部屋は、敷地に合わせた変形の狭い空間だが、本や身の回り品が置かれ子どもの城という感じであった。いっぽう、子どもが個室を与えられることに疑問を呈し「少々狭くても暮らせる。それに他にやりたいことがあって住まいの改善まで手がまわらない(M)」という意見もあった。このような時間的・経済的制約という事情は、他の人たちにも共通するところがある。また、居住用だけでなく、農家生活にとって納屋などの作業用空間が必要である。とくに土間が後述の状態であるため、別棟の納屋が母屋の脇に付属することが多い。公営の「ふるさと住宅」でもOさんは納屋を増築している。すぐやれることから本格的な増築まで、広く住む工夫が随所にみられた。

③快適性・台所へのこだわり

住みやすさ使いやすさの例として、台所のしつらえをみてみよう。地元農家のR家では1980年頃台所を土間から床張りに替え、台所設備と配置を新しくした。当家の主婦は「それまで裏の石垣に向かって炊事していたのが串本の海を見晴らすことになった」と誇らしげである。この参考例でも表れているように、台所空間は農家住宅改善の典型であり、居住性の指標となりやすい。まず、Iターン住宅の現台所の床については、土間(コンクリート)が9戸、床上が7戸と分かれた。前者には、床上との行き来のしやすさからスノコを引いたもの、前述した薪ストーブ設置の関係で土間にしているもの、も含まれる。後者は主に新築および「担い手住宅」における場合であり、古い農家住宅では2戸が床上に改造している。公営の「ふるさと住宅」では、台所床には土間が採用されている。農作業との関連で使いやすさを慮ってのことであろうが、入居者のOさんによると「土間でなくてもいいのに」とのことであった。台所が土間式なのは(山村では土間の比重が相対的に小さいとはいえ)かつての農家にとっては蓋然性があったが、環境や生活スタイルの変化に伴い必要度の低下した土間は各地で消滅し床上化していく。和歌山県の実態調査⁷⁾でも、ずっと以前からそれは顕著であったが、当地区においては土間の変化は緩慢といえる。

台所設備については、これまでにみてきたように、プロパンガス(またはIHヒーター)によるコンロ、蛇口

の付いたステンレス流しは全戸に行き渡っている。しかし自明のことながら、どうにか使えるというものから最新型のシステムキッチンまで(A, N)、あえて言えば片付け整とんまで、様々な居住レベルが見て取れ、外見的には個々の住宅によって多様である。そのなか



写真13 こだわりのF家台所

でもF家の台所は異彩を放っていた。10畳をこえる広さでレストランの厨房のようにプロ仕様の器具が置かれている。妻はお菓子作りが上手く娘も料理をするから台所は広くした、とは夫の話で、台所には入れ込んでいる風である。

4. ターン後の住居選択

移住にあたって住宅の確保⁸⁾⁹⁾は、土地、教育、交通などと並ぶ課題であり、物件の質やコストが希望に合うか、仲介者が信用できるか、関心が寄せられる。

①移住後の住居決定過程

当初から住むところが決まっている人もあるが、多くは色川にターンしてから地区内で移動している。その転居回数をみると、当初の仮住まいからの転居を含め2回以上、つまり現在は3度4度目の住まいとなるケースが5人(F, G, J, M, N)と少なくはなかった。他も多くがターン後に適当な住居に出会って転居をしている(B, D, E, I, O)。転居した理由は、始めは「住めるところならどこでもいい」と、とにかくターンし、住んでいるうちに田畑の近さや家族構成の変化などの条件に合わせて転居するのである。民家が売りに出たので購入して転居するものも多かった。また男性が単身で移住しその後妻子を呼び寄せたり妻が嫁いで来たりというものもある(G, M, N)。

初期のころIターン者がまず住む場所は、耕人舎¹⁰⁾¹¹⁾の農業実習研修をする民家であった。E, F, G, I, L, M, Nさんたちが、単身であるいは家族で利用している。ターン者の当座の生活の受け皿として、この耕人舎の「実習生のたまり場」(E)が絶対無二の存在であったことがわかる。これを公的に発展させたのが、次に述べる「籠ふるさと塾」であろう。「籠

ふるさと塾」は廃校になった小学校を改装して、1995年に新規就農者技術習得施設として町によって整備された。それ以降は、数ヶ月から1ヵ年までこの施設に滞在して農業体験実習をし、空き家情報を待つというターン者が多くなった。単に空き家を待つだけでなく、その期間に地域の人と交流し、「この人なら住んでほしい」、「家を譲ってあげてもいい」という信頼関係を築けるかどうかが重要であるようだ。その点で、籠ふるさと塾は非常に役立っている。色川地区の中心地である大野や口色川から3kmほど離れているという不便な点もあるが、長期滞在が可能で費用が安い(一人当たり1000円/日、10000円/月；調査当時)というメリットから、年間を通して利用者が多く、年間延べおよそ3000人にのぼっている(役場調べ)。施設には、単身者用のワンルームが4室と、家族世帯用の2DKが2ユニットあり、調理場や風呂などの設備が整い、布団や調理具、洗濯機など基本的なものは何でも揃う。調査対象者では、1995年以降に移住した8世帯のうちD、J、Oさん、それに実習でKさんが利用している。

他方、最初から現住宅を確保した人は、5人、ターン前から色川地域との何らかの関係を持っている人たちである。Aさんは前の住人の関係者と知り合い、直接交渉している。Pさんは先にターンしていた住人から情報を得ており、新築したHさんは偶然知り合った色川地区住民から敷地を紹介してもらった。Kさんはターン前から何度も実習に来ていて、地域をある程度知っている人であった。近年はCさんのように林業の雇用事業によるものもある。

②土地家屋の情報

「先祖代々の家屋敷や田畑をよそ者に売るなんてばちあたり」という感覚が農村にはいまだに根強い。地域内でのつながりを大事にし、つながりがなければ生活も困難だったためでもある。日常的に無人となっても、多くは家財や仏壇・神棚が安置されたままである。家主にとって空き家を手放すための積極的な動機が不足するのである¹²⁾。このような中で、Iターン者が突然押しかけて土地や家屋を売ってもらうのは不可能である。前項でも述べたが、まずは地域で暮らし、地域住民と信頼関係を築いたうえで、「～さんならちゃんとやってくれるだろう」と譲ってもらうのが主流だ。「いずれは譲ってもらえるかも知れないが、今はこちらから言い出すことではない(K)」「村の人からの情報で仲介に立ってもらい、購入した。自分という人間が分かってもらえたのだと思う(F)」のように、わきまえた意見を持つターン者が目立つ。地元の受容意識を醸成し、空き家の利活用に好循環をもたらしているといえる。また、Iターン者が増えるにつけ、「知人が先にターンしていて空き家情報をもらった。」というPさん、ターン仲間で転売というJさん(後述)のような例もある。このようなターン者同士の口コミ、情報交換が成立す

るのも、ターン者人口を一定有しその社会を独自に構成する当地区の特長といえるだろう。

色川地域振興推進委員会が1991年に結成されてからは、地域とIターン希望者との間を取り持つようになり、従前よりはスムーズになっているが、何しろ空き家が少なくなってきたため、新たな方策を考えなければならない。その一つが、近年建設のふるさと定住促進住宅や緑の雇用担い手住宅などの公営住宅である。タイミングが合えば役場の紹介でこれらに入居することもある。Oさんは、色川へ見学に来ている時に建設の予定を知って、「ラッキーにも」入居することができた。ただし入居を決める時「せっかくこんなところで暮らすのだからイロリとかある古い家の方がいいよ」と反対したIターン仲間もいた。またJさんは、移住の後、公営住宅に3年ほど住み、そのまま住むつもりだったが、知人に譲って思い切って今の古い民家を買った。前住人もIターン者で、よく遊びに来ていて家の様子を知っていたという。これらのように、「古いものを生かす」「不便さを敢えて楽しむ」気風があるのもIターン者の特長として捉えられよう。公的な住宅供給にあたっては、個人管理で増築が可能とされたり、台所を土間にしたり(Oさん自身は否定的)、など地域の定住生活への配慮がうかがわれるが、潜在的な住要求をきめ細かく把握することが大切である。さらに今後はおそらく、新築住居の増加も予想されるところで、その場合の景観との調和といった課題もあらたに生じてこよう。

③土地家屋面積と費用

調査対象住宅の敷地面積は、80～100坪程度である(聞き取り中、面積の単位には全て町歩が用いられていたもので、それに従っておく。1反=300坪、1坪=3.3㎡)。石垣で積み上げられることはあるが門塀により区分されることは殆どなく道も畑も判然としない構えである。耕作する農地は、1反～7反、平均的には2.5反といったところで、和歌山県の農家1戸当たり耕地面積100a(10反、近畿農政局統計部)よりかなり少ないが、自給には十分である。専業農家も養鶏複合だから、土地面積の規模では量れない。耕地面積は全体的に余裕があり、「狭すぎる」という不満は皆無であった。むしろ、坪単位の土地ではなく「反」単位の土地は核家族にはあまりに広すぎて草刈だけでも大変で追いつかないという人も多かった(L、O、P)。購入する際は、「～反の土地」というよりも田畑が「～段」、「～枚」という数えかたが多いようだ。色川は山間部の急斜面土地であり、田畑の大半が小さく、棚田状になっているためであろう。

住居を購入するとき、たいていは田畑や茶畑などの土地付さらに鶏舎や養鶏～羽、時には販売先顧客込みである。つまり、以前に住んでいた人の財産全てを譲り受けるというのが一般的なのだが、それらの購入費

用について聞き取りで得られたのは一覧表に示すようなものである。役場関係者の話も総合すると、現在では売買の相場は、空き家200～400万円、農地で1反当たり50～60万円、宅地で1反当たり80万円であるという。1反は300坪、約1000㎡であるから、都市の感覚では到底考えられない価格である。立地条件の厳しさに加え、「田畑の底は石がごつごつ」とやせた土壌であるのも関係する。しかしこの破格の価格が一般には、所有者側の売却・貸与意欲を削ぎ、中古住宅の流通を妨げる結果となることも否定できない。

住まいに関する費用は、始めの購入の際には求めやすいが、改修や維持管理が大変であるのは前にも述べた。新築するのと大差ない出費をしたAさん、多額な改修費を負担したためその後の家賃がタダ同然のGさんのように、入居時に大規模な改修が常態化している。一方、ターン者たちはなるべく現金を使わないで済むように、廃材や間伐材を利用して自力で大工仕事を楽しんでいる人たちも多い。



写真14 廃材を集めて自分で小屋を作る

借家の場合の家賃について付け加えると、公営住宅は月当たり賃貸料1.5万円、と築年の新しい住宅であるにも関わらず格安である。地元の空き家を借りている場合も同様に安いのは、居住することで住宅の老朽化が阻まれ管理も行うことになるからである。

5. 住生活にみるターン者としての生き方

以上みてきたことも踏まえて、ターン者に共通すると考えられる住生活の傾向をまとめてみる。

○自然を大切につつましく住む

衣類は古着で十分、畳は拾ってきた、丸太はそこらにころがっている、というような言葉はしばしば聞かれた。だから、使わないからといって簡単に物を捨てたりすると文化摩擦がおきる。彼らにとって「もったいない」は、社会的規範である。

「人体や自然環境を配慮すると農業＝有機農法しか有り得ない」の思考パターンと同様、古いものや自然のもの、土着の伝統ある建物や内装に関心をもってい

る。化石エネルギーや人工的な材料は排し、地元に通綿として受け継がれた住文化を地元に根付くやり方で大切にしたいと考えている。これらは初期のターン者により顕著ではあるが近年のターン者でも、建築材料の安全性や環境問題が取り沙汰され、ある程度は当たり前のこととして、第一次的生活への意識を持っている。エコロジーや健康志向の高まりという時代背景もある。

○自分でつくる・する

必要なものは自分たちで作り出していく自給自足の生活姿勢は、現代都市生活では快適性・利便性と引き替えに急速に失ってしまったが、ターン者の全体的な傾向としては、「ものをつくること」に興味関心があり、特に自ら創り出すことに意義を感じている、ということも挙げられる。見よう見まねでなんでも作ってしまう自力徹底型、大工に頼むができるところは自分でという折衷型、そして少数だが、プロに任せる外注型や何もしない(したいができない)住めればいい型のタイプ分けができるようである。当人の価値観のほか、資質能力、経済力、時間の有無などが左右するが、Fさんの言うように「ここに来てから自分で作ることにたどりついたという感じ。完全ではないが出来るだけしたい」と、意欲的に手作りを試みる人が多い。一方で、丹念に柱や建具を磨き上げ、石垣を巧みに積み上げる地元民へ対する畏敬の念を語る人もいた。「都会でやわやわに育った自分らにはとても無理」といいながらも「先人の知恵として地域文化を少しでもつないでいきたい(M)」と表明される。

○オープン・ウェルカム

家の中は開放的にできていることもあって一足踏み入れるなり私生活がまともに見えてしまうようなところがある。例えば寝間や台所は奥のほうに隠された内々の空間などではなく、客人の目に曝されるところである。事実、私たちの戸別訪問の際、応対をしていただくのは、多くが食卓に置かれているものを横に押しのけてであった。他人から隠したりしないのは、隠しようも無いからでもあるが、Iターンに自己実現を求めた生き方を肯定する自信のあらわれとも思えた。新しい生活を楽しみ面白がって生きているのが伝わってくる。Iターン者を中心に、地域活性化にむけて多彩な地域活動、イベントが展開されていることとも無縁ではない。地元民とターン者、そしてターン者仲間で、時には価値観がぶつかりプライバシーの欠如や隣人の「お節介」に戸惑うとしても、地域の交流を通して家族や地域、友人など新しい人間関係の構築が模索され、むらづくり、地域づくりが進められているといえよう。

IV 結語

以上、事例に基づいて、過疎地域ターン者のきわめて具体的な生活情報を整理してきた。

有機農法に熱心に取り組む人、自給程度の農業を目指す人、農外就労や起業する人、自然の暮らしを求めて、子育てのために、退職後の新天地、など、現在の色川にIターンする人は様々な経歴と目的をもっている。ターン者は一人ひとりの個性があって多様であり一言で「こうである」とは言いがたい。そのことは、住まいと住まい方についても共通している。結局のところ、住生活のあり方を決めるのは住む人の住居観であり家庭の生活条件である。こだわりがあるものには徹底的に入れ込む人もいる。「ターン前と同じ」住まい、つまり都会的な住まいをそのままこちらでも再現するケースもある。また思いの強さにくらべ生活実態が伴わなかったりもする。底流にターン者として共通する生活志向を保持しながらも、住まいのあらわれるところはそれぞれに個性的である。

ここで付言しておきたいのは、農村に入って共同体運動を志した耕人舎が色川で顕在的・潜在的に果たした役割である。耕人舎は、1977年設立され、79年より農業実習生受け入れを開始した。彼らの掲げる、楽農、手仕事複合、仮設コミュニティ、自然界の循環、といったキーワード¹⁰⁾は、程度の差こそあれ現在のターン者の生活規範として底に流れているように思われる。また、かつてターン者が寄留し世話になったという耕人舎のたまり場は、籠ふるさと塾へ発展的解消され、受け入れシステムも行政と一体となって官民で整備された。現下、耕人舎は実体を消失しその評価もさまざまなようであるが、色川Iターンの(さらには全国に広

がるターンの)歴史に果たした先駆的な役割は大きなものがある。

歴史と伝統のある色川Iターン者たちの生活は、価値観の多様化・交錯化する現代、団塊世代の田舎暮らしが社会にもてはやされるなか、どのような変化をとげていくのであろうか。

本調査にあたり多大なるご協力をいただいた関係者の皆様に深謝申し上げます。

参考文献

- 1) 深渡直子「過疎地域ターン者の住生活から見直す第一次的生活と教育実践への提案」和歌山大学大学院教育学研究科修士論文、2007
- 2) 拙著「過疎地域ターン者の生活に関する一考察—色川地区を事例に—」和歌山大学学芸、第54号、2008
- 3) 拙著「農山村の民家と暮らし—和歌山県下2地区を事例に—第2報 民家における水の利用について」教育学部紀要(人文科学)、第56集、2006、P76
- 4) 安藤邦廣・他『住まいの伝統技術』建築資料研究社、1995、P28
- 5) 新穂栄蔵『ストーブ博物館』北海道大学図書刊行会、1986、P93
- 6) 前掲書3)、P81
- 7) 拙著「住生活の現状」『和歌山県における家庭生活の現状』家政科研究室、1980、P81
- 8) 国土交通省「地域への人の誘致・移動の促進に関する調査報告書(案)」2007、P72
- 9) 和歌山県「田舎暮らし支援事業報告書」、2008、P31
- 10) 「耕人」編集部『耕人舎友会って何だ?』ブックレット、1984
- 11) 前掲書2)、P156
- 12) 国土交通省「二地域居住促進等のための空き家の活用に関する調査」、2006(http://www.mlit.go.jp/kisha06/02/020707_.html)

調査対象者及び住宅の概要についての一覧表

	A	B	C	D	E	F	G	H
世帯主年齢	60歳代	50歳代	30歳代	40歳代	60歳代	50歳代	50歳代	60歳代
家族構成(人数)	夫妻・子(3)	夫妻・子(4)	夫妻・子(3)	夫妻(2)	夫妻・子(5)	夫妻・子(4)	夫妻(2)	夫妻(2)
現在同居家族構成(人数)	夫妻(2)	夫妻(2)	夫妻・子(3)	夫妻(2)	夫妻・子(3)	夫妻・子(3)	夫妻(2)	夫妻(2)
前住地	東京都	東京都	島根県	大阪府	東京都	大阪府	東京都	兵庫県
ターン前職業	公務員・教員	会社員	(林業)	会社員	自営業(板金)	会社員	会社員	薬局経営
ターン時期(経過年)	2005.3(1.5年)	単身1978(28年) 移住80?	2005.4(1.5年)	2001.4(5年)	1996(10年)	1988(18年)	1986?(約20年)	1996?(約10年)
色川決定理由	田畑近く「自分でもやれる」	土地費用・海	仕事	仕事・趣味	土地費用・感覚的に	先人「自分でもやれる」	温暖な気候	先人と知り合って
現金収入源	年金	野菜・卵・牛	夫林業雇用	アルバイト	年金・野菜	卵・野菜	米・野菜・不動産	年金・お寺
自給しているもの	野菜・米の半分以下	野菜・米	野菜少々	無	野菜・米	卵・野菜・米	米・野菜・猪	野菜少々
地域内転居回数	無	2	無	1	1	2	1	無
籠ぶらさど塾の利用(月)	無	無	無	有(2年)	無	無	無	無
現住宅情報源	先住人	地域住民	仕事とともに	仕事とともに	地域住民	地域住民	地域住民	地域住民
宅地面積	100坪程度		—	—	100坪		80坪	
住居・宅地費用	280万円と改修費	全てで3反くらい	1.5万円/月	1.5万円/月	田畑・鶏舎込みで400万円程度	(100万程度) + ログ	借家・無料/改修費	広大な土地(山)を購入しお寺を兼ねた住居である
農地面積	2反と茶畑		—	—	1.5反	2反	3反	
農地費用	320万円(鶏舎込み)		—	住居に込み		100万円	無料	
住宅形態	木造平屋	木造平屋・自力増築	木造平屋(古い手住宅・新築)	木造2戸1(古い手住宅・新築)	木造平屋・納屋2F	木造平屋	木造平屋	木造平屋
大規模増改築	内外大改修	自力増築	無	無	少々	出し屋、ログハウス(自力建設)	改修	無
屋根材	スレート	鉄板	鉄板	鉄板	瓦	瓦	瓦	瓦
住宅間取り	整形四間取り+1→4LDK	本屋は2室+張り出し+離れ	2DK	2LDK	整形六間+張り出し	整形四間+張り出し+出し屋	整形四間取+張り出し	宿舎形態
居住室の量数	45畳		19畳	24.5畳	32畳	29畳	20畳	—
台所床形式	床上	土間	床上	床上	土間	土間	土間	床上
住設備①台所	電気・システムキッチン	ガスレンジ・かまども有	ガスレンジ	ガスレンジ	土間・ガスレンジ・七輪	土間・ガスレンジ・広大	土間・ガスレンジ	ガスレンジ
②風呂	電気	五右衛門風呂・ソーラー	ガス	ガス	ガスとソーラー	改裝・灯油・ソーラー	五右衛門風呂	ガス
③便所	水洗・合併浄化槽	自家汲み取り・空中トイレ	簡易水洗	簡易水洗	業者汲み取り	簡易水洗・自家汲み取り	自家汲み取り	水洗・合併浄化槽
④冷暖房	エアコン	薪ストーブ	石油ストーブ	ガス・電気	薪ストーブ	薪ストーブ・こたつ	こたつ・扇風機	こたつ
エネルギー源	オール電化	ガス・電気・薪・炭・ソーラー	ガス・電気	ガス・電気	ガス・電気・ソーラー	ガス・灯油・電気・薪・ソーラー	ガス・電気・薪	電気・ガス
水	井戸・沢水	沢水	グループでタンク	グループでタンク	沢水	沢水	グループでタンク	
住み心地(○：良好)	△	○	○	○	○	○	○	○
情報・物資調達	車・Net・移動販売車	車・Net	車・Net・近所	車・Net	車・本・Net	車・Net・ロコミ	車・Net	車
地域の安全性(○：良好)	○鍵なし	○	○子の散歩	○鍵なし	○	○	落雷が多い	○病気になることも受け入れる

調査対象者及び住宅の概要についての一覧表（続き）

	I	J	K	L	M	N	O	P
世帯主年齢	50歳代	40歳代	40歳代	40歳代	50歳代	40歳代	50歳代	50歳代
家族構成(人数)	夫妻・子(4)	夫妻・子(5)	夫妻(2)	本人(1)	夫妻・子(5)	夫妻・子(4)	夫妻・子(4)	夫妻・子(6)
現在同居家族構成(人数)	妻・子(2)+母	夫妻・子(5)	夫妻(2)	本人(1)	夫妻・子(4)	夫妻・子(4)	夫妻(2)	夫妻(2)
前住地	東京都	大阪府	東京都	大阪府	各地・大塔村	各地・兵庫県	東京都	大阪府
ターン前職業	夫・フリーター	会社員・教員	会社員	教員	会社員	フリーター	会社員	団体職員・看護師
ターン時期(経過年)	1990.3(16年)	2000(6年)	2006.7(2ヶ月)	1987ころ(約19年)	1981(25年)	1989ころ(約17年)	1997(9年)	1992(14年)
色川決定理由	先人	住居費・田畑があること	自然環境(海・山・川)・先人	先人モデルが沢山あった	梨川はここにしかなかった、Iターン者	自然農法	遠くから景色を見て直感的に	Iターン加入暖かくて目の雪なところ
現金収入源	米・野菜・卵・アルバイト	夫自営・妻求職中	求職中(ヘルパー)	卵・野菜	卵・野菜・米	夫・勤務/妻・長宿・菓子工房	茶・野菜	妻・勤務/野菜林業など
自給しているもの	米・野菜・卵	米・野菜	未(これからは自給を目指す)	野菜・卵	卵・野菜・米	野菜・卵	野菜・米(自給はそんなにない)	米・野菜・鶏
地域内転居回数	2	2	無	無	2	2	1	無
籠ふさと塾の利用(月)	無	有(1ヶ月)	有	無	無	無	有(半年)	無
現住宅情報源	地域住民	前住人(Iターン者)	古参Iターン者	前住人(Iターン者)	地域住民	地域住民	推進委員	Iターン知人
宅地面積							—	
住居・宅地費用								
農地面積								
農地費用								
住宅形態	木造平屋(移住後新築)	木造平屋(築10年)移住8年の棟札	木造平屋	木造平屋	木造平屋(床下腐って、使用不可)腐付	木造2階(移住後新築)	木造平屋(ふると住宅・新築)	木造平屋
大規模増改築	(母呼び寄せ別棟増築)	屋根	改修(一部自力)	無	無	居住部分を新築	納屋増築	改修
屋根材	瓦	スレート	瓦	瓦	瓦	スレート	スレート	
住宅間取り	3室並列+LDK	整形四間取り+張り出し	整形四間取り+張り出し	整形四間取り+張り出し	元は整形四間取り?	3LDK+民宿・工房	3DK	整形四間取り+1
居住室の量数	35畳	22.5畳	19.5畳	22畳		35畳+α	24畳	24畳
台所床形式	床上	土間	土間	土間	土間	床上	土間	床上
住設備①台所	ガスレンジ	土間・ガスレンジ	土間・ガスレンジ	土間・ガスレンジ	土間・ガスレンジ	ガス・システムキッチン	土間・ガスレンジ	土間・ガスレンジ(かまども残る)
②風呂	灯油・薪・ソーラー	灯油・薪・ソーラー	ガス	?・ソーラー	五右衛門風呂	灯油・薪	ガス・ソーラー	五右衛門風呂
③便所	業者汲み取り(年3回)	業者汲み取り・紙分別	業者汲み取り・紙分別	自汲み取り(5年に1回・機械をかける)	自汲み取り・糞糞と混ぜて肥料に	簡易水洗	簡易水洗	自家汲み取り
④冷暖房	こたつ・石油ファンヒーター	扇風機・エアコン・薪ストーブ	これから	扇風機・こたつ・電気ストーブ	こたつ・扇風機	扇風機・こたつ・ストーブ・七輪	扇風機・石油ファンヒーター	ストーブ
エネルギー源	電気・ガス・灯油・薪・ソーラー	電気・ガス・灯油・薪・ソーラー・薪	電気・ガス	電気・ガス・ソーラー	電気・ガス・薪	電気・ガス・灯油	電気・ガス・灯油・ソーラー	電気・ガス・薪
水	沢水	沢水	沢水	沢水	グループでタンク	グループでタンク	グループでタンク	グループでタンク(今年から)
住み心地		〇面白がっている様子	△湿気がすごい	△湿気がすごい	〇住めば都	〇景色が気に入っている	△土間・飾り棚など不要	〇
情報・物資調達	車	車・Net	車・Net	車	車	車	車	車
地域の安全性	〇病院は頼っていない	〇	〇	〇	〇	〇自分たちで身につける	〇	〇近所の人気がかけてくれる